

恋人はスナイパー
エピソード3への道
十字架編 ()

赤龍省・コー・村木の別荘
ヘリポートに、ヘリコプターが着く。
別荘から出て来た男たちが、ヘリコプターに群がる。
中から凱歌とコーが降り立つ。
男たちが毛皮のロングコートを、2人の肩にかける。
吐く息が白い。
息さえも凍えてしまいそう。
凱歌とコーの生まれ故郷の村である。
中国の北のはずれにある、寒くて貧しい国だ。
村の高台にあるコーの別荘。
別荘から村を見渡すことができる。
冬枯れの景色。
目の前に湖が見える。
その上には、薄くもやがかかっている。
凍っている湖。
湖を囲む切り立った山々は、うっすらと雪化粧をしている。
かじかむような空は、憂鬱な色をしている。
その光景を、かみしめるように眺めている凱歌。
コーがその横に来て立つ。

コー「何もない所だろ」

凱歌「・・・」

コー「湖の向こうはすぐロシアだ。ロシアとの交易を、もう少し盛んにしたいと
思っている。村も潤うだろう」

凱歌「僕には故郷(ここ)での思い出がない」

コー「俺だって、いい思い出はない。いつも飢えていた」

コー、別荘へと向かう。

コー「来月になると、ここからもう少し南へ行った大きな街で、氷祭りが開かれるんだ」
凱歌がついて来ないことに気がつき、声をかける。

コー「凱歌」

凱歌が振り返る。

その寂しげな顔があまりにも、暗い故郷の風景に似合いすぎていたので、コーは言葉を失う。

凱歌がコーのそばへ来る。

コー「故郷(ふるさと)ってというのは、人の心を感傷的にしてしまうな」
2人、別荘の方へ歩きだす。

同・内

玄関のドアが開けられ、凱歌とコーが入って来る。

左右に並んで、彼らを迎える1211の男たち。

別荘で働いている男たちもいるが、それに加えて、先に来て準備を整えていた男たちもいる。

コーに近づく1人の男。

趙(50)である。

彼は別荘の管理を任されている。

心得たようにコーの後ろ、1歩下がった所で止まる。

趙「お帰りなさいませ」

コー「うむ。(凱歌に目をやり)趙、これが王凱歌だ」

趙「あ、弟様で・・・？」

コー「ああ。よろしく頼む」

趙、1人の男を呼びつけ、凱歌につける。

男は凱歌を部屋へと案内するために、連れて行く。

趙「役人共が、歓迎のパーティーを開きたいと・・・」

コー「早いな」

趙「金の匂いには敏感で」

コー「どうせ、しょっぱいパーティーだろ。こっちで開いてやれ。

凱歌のことも披露したい」

趙「はい」

コー「村の者も呼んで、盛大に」

趙「かしこまりました」

同・凱歌の部屋

凱歌が、部屋に案内されて入って来る。

相も変わらず、コーの成金趣味的な贅沢な部屋。

毛皮のコートを脱ぐ。

床に落ちるコート。

上着も脱ぎ、半袖のTシャツ1枚になる。

胸元に揺れる范の十字架。

さっそく、拳法の練習に入る。

竹にも似た、そのしなやかな動きは澄んでいる。

ドアが静かに開く。

立っているコー。

凱歌の動きを目で追っている。

手をだしてくるコー。

受ける凱歌。

稽古というよりは、真剣にやりあう2人。

凱歌の胸元へ拳を繰り出したコーが、十字架をつかむ。

コー「范のだな」

凱歌「あ・・・」

凱歌、十字架を取り返すように握りしめる。

コー「お前は、何を背負ったというんだ」

凱歌、答えずにくるりと背を向けると、1人で拳法の練習を始める。

しばらく眺めていたが、

コー「生まれた家を、見に行くか？」

コーの方を向き、静かに息を吐く。

凱歌「はい」

村の中

コーは毛皮のロングコート、凱歌は動き易い黒の皮のジャンパーで、村の中を歩いて来る。

村人たちがコーの姿を認めては、走り寄って来る。

しかし、彼のアレルギーのことを知っているので、一定の距離をおいて声をかけてく

る。

それが親愛の情がこもっていたり、尊敬の言葉であったり。

凱歌「親しまれているんですね」

コー「（苦笑）この村の者たちは、すべて親戚らしいよ、いつの間にか」

1人の老婆が、若いカップルを連れて来る。

老婆「（中）コーさん、孫が嫁をもらいました」

コー「（中）それはよかった。親父さん、心配していたもんな。また、香港から荷物が届くから、何かお祝いを差し上げよう。（集まっている人々に）近いうちにパーティーを開くから、皆も来なさい」

人々から歓声があがる。

村はずれ

それほど大きくはないが、豪華な感じの寺がある。

コー「俺が改築させたんだ。もとはぼろぼろだったんだぞ」

と自慢する。

寺を眺める凱歌。

金をかけて改装した様子が見てとれる。

コーが、寺の敷地内にある2人の生家へと凱歌を案内する。

寺とは反対に、荒れ果てた家。

コー「これが、お前の生まれた家だよ。ここへ移築したんだ。あの頃を忘れないように。

それに、何よりお前に見せたかったから」

扉を開けて、先にコーが中へ入る。

凱歌が続く。

同・凱歌とコーの生家・内

暗い家の中。

埃だらけのテーブルや椅子。

そのテーブルの上のろうそくに、火をともしコー。

その減り具合で、彼がここを度々訪れていることがわかる。

粗末でわずかばかりの家具。

片隅においてある汚いゆりかごが、凱歌の目を引いた。

気がついて、コーがゆりかごに近づく。

コー「日本の、母の実家から送られてきた物だ」

そっとゆらす。

コー「お前、いつもここに寝かされていた」

凱歌も近づく。

コー「お前で3人目だった。よく働いたよ、こいつも」

凱歌「3人？」

コー「もう1人いた。俺のすぐ下に弟が。お前にとってはもう1人の兄」

凱歌「その人は？」

コー「・・・出ようか」

同・寺の敷地・内

生家から出て来るコー、続いて凱歌。

そのままコーが寺へ向かうので、凱歌もついて行く。

同・寺の中

僧たちが、入って来たコーと凱歌を迎える。

兄弟は長い線香を捧げ、逝ってしまった家族のために祈る。

その光景にコーの声が重なる。

コーの声「父も母も貧しさの中で死んだ。家に来ていた客人の中に、香港から来た男がいた。その人を頼って、俺と弟は村を出た。金持ちになったのに、弟を失ってしまった。

香港での覇権争いの時だった」

凱歌の声「兄はどんな人、だったんですか」

同・寺の前

コーが凱歌を見る。

それから、遠くの方へ視線を移す。

コー「・・・もう・・・忘れた」

凱歌「・・・ごめんなさい。嫌なことを」

コー「（じっと手を見て）この手の中で、だんだん冷たくなっていったんだ・・・。それからだよ、俺が他人アレルギーになったのは」

凱歌「・・・」

コーの別荘・凱歌の部屋

早朝。

ベッドで眠っている凱歌。

白い光がやけにまぶしくて、目を覚ます。

窓一面が真っ白である。

起き上がり、窓の外へ目をやる。

凱歌「！」

同・リビングルーム

防寒具（スキーウエア）に身を固めた凱歌がやって来る。

暖炉の上の壁にかけてある猟銃を取る。

棚の引出しから銃弾を見つけだす。

飛び出していく。

山の斜面

スキーで滑ってくる凱歌。

シュプールが綺麗に描かれる。

昨夜のうちに雪が積もり、まだ降っている。

雪の中に何かの気配を感じて、見回りに出たのだった。

雪煙をあげて止まる。

肩にかけた猟銃。

サングラスを外し、双眼鏡を覗く。

慎重に周りを偵察する。

耳が痛くなるほどの静けさ。

後方で音がして、とっさに銃を構える。

その先には、美しい牡鹿がいた。

凱歌を睨んでいる。

銃を下ろす。

無意識に微笑んでしまう。

牡鹿はゆっくりと、凱歌から視線を外す。

林の中へと消えて行く牡鹿。

その堂々とした態度に圧倒される。

下の方で車の音がする。

複数だ。

見ると、除雪車を先頭に、4WD車、続いてトラックの群れがのろのろと進んで来る。

1 2 1 1の大キャラバンが来る。

凱歌が感じたのはこの気配だったのか。

サングラスをつけ、スキーをそちらへ向けて滑りだす。

雪道

除雪車を先頭に、1 2 1 1のキャラバンが行く。

除雪車が止まる。

後ろの4WD車から、楊が出て来る。

除雪車の運転席の方へ行き、何事か話し始める。

4WD車の後部座席に、きなこ八雲が乗っているのが見える。

4WD車・内

後部座席で窓の外を眺めているきなこ。

その横で、いびきをかきながら寝ている八雲。

きなこは、雪景色に目を奪われている。

と、その目の前を、スキーに乗った凱歌が通り過ぎる。

きなこ「え？ホイさん？」

雪道

除雪車の男と話している楊のところで、スキーを止める凱歌。

凱歌、楊に話しかける。

きなこ、慌てて防寒具（男物）を着込んで、車からでる。

きなこ「ホイさん！」

凱歌「！（見る）」

きなこ、また冷たくされるのでは、と不安。

サングラスを外し、

凱歌「きなこ・・・さん！？」

きなこの姿を認めた凱歌の顔が、ぱっと明るくなる。

が、すぐに険しい表情になる。

凱歌「日本へ帰ったんじゃないのか」

きなこ「・・・（懐かしそうに見る）」

凱歌「・・・（柔らかな表情になっていく）」

お互いに視線を外すことができない。

2人の交わる視線を遮るように、陳が真ん中に立つ。

陳、凱歌に、張りつけたような笑顔を向ける。

凱歌「（中）あんたも来たのか」

凱歌の顔が明らかに曇る。

陳「（中）俺もこうやって、故郷にお宝をどっさり持って帰りたいもんだ」

凱歌「・・・（真意を探ろう）」

陳「・・・（見透かされまい）」

きなこ「ホイさん・・・」

凱歌「きなこさん、行こう」

きなこ「いいの？」

凱歌「ああ、おいで」

きなこ、凱歌のところへ走る。

凱歌のスキーの後ろに乗る。
ややためらうが、凱歌の背中にしがみつく。
スキーを滑らせる凱歌。
2人の姿は、みるみるうちに湖の方へと消えた。
陳が苦々しい笑いを浮かべて、見送る。

斜面

湖へと向かっている凱歌。
背中にきなこの体温を感じて、幸福である。
きなこ、彼の背に頬をつける。
やっと会えて、安堵している。
しかも、自分を受け入れてくれた。
が、その目に猟銃が映る。

きなこ「銃を？」

その言葉が、凱歌を現実に戻した。

凱歌「・・・僕は、悪魔になる」

凱歌は、先程までの幸福感を拭いさる。
きなこ、後ろから強く抱きしめる。

湖のほとり

凍っている湖。
その周りに建ち並ぶ土産物屋、ホテル、レストラン。
しかし、それらはしっかりと戸締りがされている。
閉塞感と寂寥感が漂っている。
その中にいる凱歌ときなこ。

凱歌「みんな、コー・村木が造ったものだ。夏は避暑地として、にぎわうそうだが・・・」
疑わしい。

きなこ「そう・・・。コーは、あなたのお兄さんなんですよってね」

凱歌「・・・ああ」

きなこ「そして、ここが、あなたの生まれたところなのね」

凱歌「でも、やっぱり、僕の故郷（ふるさと）は、母さんと暮らした・・・あの家だ」

きなこ「いつか、行ってみたいな、ホイさんの故郷」

凱歌「いつか・・・」

2人、黙ってしまう。

凱歌「（意を決し）きなこさん、結婚は？」

きなこ「してたら、ここへは来ないよ」

凱歌「（うれしいが）僕のせい？」

きなこ「私よ。私がね・・・」

切なくなって、言えなくなってしまう。

凱歌「（うつむき）ごめん」

そんな言葉しかでてこない。

雪の中のゴーストタウンを、スキーで通り抜けて行く。

コー・村木の別荘・ダイニングルーム

複数の大きなテーブルに、男たちが群がっている。

荷物を運んで来た男たちである。

コックたちが、でき上がったばかりの料理を、次々と運んで来る。

皿は、たちまちのうちに空になっていく。

温かい料理が、冷え切った男たちの胃袋へとおさめられていく。
無事に仕事を成し遂げた男たちは、饒舌になっていてかなり賑やかな食卓だ。
趙がテーブルの脇に立って、満足そうに彼らを見守っている。

ついたてを立てた向こう側には、1 2 1 1の幹部たちがいる。
コーを囲んで陳、楊、そして八雲までもが、ゆったりと食事を楽しんでいる。

コー「(中) 楊、ご苦労だった」

楊「(中) いえ」

コー「(中) ご苦労ついでに、後で趙と一緒に荷物のチェックを頼むぞ」

楊「(中) はい」

コー「(中) ところで陳、どうしてお前まで来たんだ？頼んでおいた仕事があったはずだぞ」

陳「(中) ボス、あれは俺の仕事じゃねえ」

コーの箸が止まる。

コー「(中) お前の手に負えんのか、それとも、お偉いお前が動くほどのことではない、と？」

その鋭い皮肉に、楊と八雲の箸が止まる。

陳は平然としている。

陳「(中) もっとデカイ仕事をさせてほしいんだ」

コー「(中) ほう、わがままになったもんだな」

コー、立ち上がる。

陳「!(見上げる)」

コー「(中) 食ったら帰れ」

陳「(中) そりゃあないよ、ボス」

コー、陳の首のそばに片手を近づける。

陳、苦しみだす。

コーの気の力か。

コー「(低く中国語で) いいか、ナンバー2だの3だのと、うっとうしいんだよ。上にいるのは俺だ。後は全部下なんだよ」

箸がおち、口の中の食物もぼろぼろとこぼれる。

コー「(中) 言われた通りに、動いてりゃいいんだ」

コー、離れる。

解放される陳、むせている。

コー、八雲のそばへ行く。

八雲、慌てて箸を動かし始める。

コー「何で、あのおとこ女(男顔の女の略)を連れて来た？」

隣のリビングルームが見える。

そこには食事のきなこの姿が見える。

八雲「お、脅されたんで……。恋する女は強くて……」

八雲、飯をかきこむ。

むっとしてきなこを睨む、コー。

同・リビングルーム

豪華で凝った作りの大きなテーブルで、向かい合って食事をしている、凱歌ときなこ。

その距離はだいぶ離れている。

テーブルに沿うように、ずらりと若い女たちが立っている。

彼女たちの着用している服は、コーが楊に用意させた物だ。

体の線を強調したものや、肌の露出の多いチャイナドレスである。

彼女たちが入れ替わり立ち替わり、2人の給仕をしている。

窮屈そうに食事をしている、きなこ。

女たちが、時折、きなこをキッと睨みつける。

ますます、居心地が悪くなってしまいうきなこ。

ため息と共に箸を置いてしまう。

きなこ「(ささやくように)あの一、ホイさん」

凱歌は、料理を運んで来た女と言葉を交わして、気がつかない。

凱歌は、彼女たちの服装は気にならない様子だ。

きなこ「(大きく)ホイさん！」

凱歌、きなこを見るが、そこにいた女たちも、動きを止めて一斉に彼女を見る。

ギョッとなるが笑顔を作り、

きなこ「なーんか、皆さん、すごいかっこうだね、朝から」

凱歌「そう？」

きなこ「気にならないの？」

凱歌「あ(気がついて)そう言えば」

きなこ「遅いよ！」

凱歌「前に、こんな感じの店で用心棒、やったこと、あるから」

きなこ「(複雑)慣れ・・・か」

2人の会話の間中、女たちが敵意のこもった目できなこを見つめている。

きなこ「気のせいかなー。皆さん私のこと、敵視している？」

凱歌「あ・・・どうかなー？」

と首を傾げる。

何か誤魔化しているようだ。

きなこ「絶対そう。どうして？日本人が嫌いなの？」

凱歌「いや・・・その・・・(照れて)皆、この村の娘(こ)たちで・・・」

きなこ「(鋭く)で？」

凱歌「(きなこを見られない)僕の花嫁候補たち・・・らしい・・・んだけど」

きなこ「えーっ!？」

きなこ、驚いて見回す。

きなこ「全員？」

コーの声「そうだ」

きなこ「!(見る)」

コーが入って来る。

コー「やはり生まれ故郷の女が、一番ウマが合うだろう」

きなこ「ふーん」

コー「凱歌にはたくさん、子を作ってもらおう」

凱歌・きなこ「(びっくり)はあ？」

コー「俺は女に触れることもできん。だが、血は絶やしたくない。

凱歌に頑張ってもらわんと」

凱歌、真っ赤になってうつむいてしまう。

コー「(茶化して)きなこちゃん、あんた、愛人にでもなるか？刑事をやめて」

きなこ「話にならないわ」

コーときなこ、鋭い視線で睨み合う。

火花が散りそう。

凱歌の声「きなこさん、部屋へ案内しよう」

凱歌が割って入る。

きなことコーが、同時に視線を外す。

2人共、疲れた。

きなこ「ええ、お願い」
コー「陳がすぐ帰る。あんたも一緒に帰るんだな」
凱歌が立ち上がる。
女たちが寄って来る。
手で制する凱歌。
女たちが止まる。
凱歌、きなこを連れて部屋を出る。

同・ゲストルーム
たくさんあるゲストルームの1つに、きなこを案内してくる凱歌。
きなこ「うわっ、豪華だね！」
高級ホテル顔負けの調度類が、ぴかぴか光っている。
掃除も行き届いている。
大きな窓からは、庭の雪景色が見える。
きなこ「私ね、今、八雲さんのおばあちゃんの家にいるのよ、骨董街の。ごちゃごちゃとした狭い家なんだけど、とっても居心地がいいんだ」
凱歌「それは、住んでいる人が、あったかいからなんだろうな」
きなこ「うん、そうだね」
凱歌「君の家に、ホームステイした時もそうだった」
きなこ「口うるさいけど、ね」
凱歌「僕には羨ましかった……。 (表情硬く) 温かい家族のもとへ、早く帰った方がいい」
きなこ「陳がここへ来たことは、計算違いだったみたいね」
凱歌「君が来たことも」
きなこ「(むっとして) ああ、そうでしょうね。若くて綺麗な女の子たちに囲まれて、毎日楽しくやっていたんでしょ。こんなおばさんが来ちゃって、迷惑でしょうよ」
凱歌「そうじゃない」
きなこ「(急に真面目な顔になり) わかってる」
凱歌「え？」
きなこ「私を巻き込みたくないんでしょ。芝居、下手だからすぐわかっちゃう」
凱歌、困惑したような笑顔を残して、出て行こうとする。
きなこ「待って！」
凱歌の足が止まる。
きなこ「あなた1人じゃ無理よ。私にも手伝わせて」
凱歌「(静かに首をふり) 君が僕の運命(さだめ)につきあう必要はない」
出て行く。
きなこ「大人しくなんて、しているもんですか」

同・倉庫
着いたばかりの荷が、男たちによって運びこまれている。
趙と楊が点検をしている。
食料品、生活雑貨、衣料品、燃料等と様々な荷を仕分けしている。
陳が、手下を引き連れてやって来る。
陳「(中) 俺の荷物を引き取らせてくれ」
趙「(中) あなたの？ ちょっと調べさせていただいて、よろしいですか？」
陳「(助けを求めて中国語で) おーい、楊、どういうことだよ」
楊「(中) 趙さん、向こうを出る時、私が調べましたが……」
趙「(中) ここでは、私が責任者なので」

趙、陳の荷を探す。

すぐに見つける。

趙「(中) ああ、これですね。ま、一応ということです」

趙が荷を解き始める。

陳「(中) わー、よせ！こんな所で」

とうろたえる。

荷物の中から、派手な下着(陳の物)やらヌード写真集やらが出てくる。

枕までも。

陳の手下がくすりと笑う。

趙「(中) 失礼しました」

陳、急いで荷をまとめる。

陳「(中) 部下の前で恥をかかすなよ。じゃ、いいな。もらっていくぞ」

趙「(中) どうぞ」

陳の手下たちが荷を運ぶ。

趙と楊は、仕事の続きにとりかかる。

陳は2人が見ていないことを確かめると、荷の中からヌード写真集を一冊取る。

ビニールを破り中を開くと、くりぬかれた本の中に、拳銃が入っている。

湖

湖から氷が切り出される。

その氷を積んだトラックが、高台のコーの別荘へと向かう。

コー・村木の別荘・中庭

湖から切り出された氷が、運びこまれている。

大量の氷が積んである。

氷祭りが行われる南の街からよばれた男たちが、その氷を重ねたり削ったりして作品を作っている。

夜。

たくさんの氷の彫刻が、美しくライトアップされている。

様々な色のライトが、氷を通して神秘的な雰囲気醸しだしている。

人々の笑い声や音楽が、別荘から溢れだしてくる。

同・内(夜)

クリスマスイブである。

1階はすべて開放され、広いパーティー会場となっている。

大きなクリスマスツリーが、真ん中に飾られている。

ツリーの下には、村人たちへのプレゼントが、どっさり置かれている。

無邪気な子供たちが、包みを開けて歓声を揚げる。

豪勢なシャンデリアが、会場を照らしている。

暖炉の火が揺れている。

ぴかぴかに磨き上げられた、大理石の床や白い壁。

招かれた村人たちが、めいっばいのおしゃれをして集まって来ている。

つんととりすました別荘であるのに、彼らのお陰で、どこか、アット・ホームなパーティーとなっている。

村人たちが、手垢で汚れた楽器を持ち寄って、にぎやかに音楽を奏でている。

老若男女が輪になって、この地方の踊りだろうか、楽しそうに踊っている。

子供たちもはしゃいで、ぐるぐる回っている。

その中を給仕が忙しそうに、食べ物や飲み物を運んでいる。
カウンターバーもある。
厨房では大勢のスタッフが、人々の要望に応じて、様々な料理を提供している。
客たちは大いに食べ、飲んでいる。
すっかり酔っ払って、いい気分になっている男たち。
おしゃべりに興じながらも、しっかりおいしい物を口に運んでいる女たち。

八雲は女をくどきまわっている。
八雲「(中)俺、日本で社長さんをしているんだよ」
どの女にもそう声をかけている。
女たちは信じていないようだ。
邪険にされてもめげない。
八雲「1人だけでも、お持ち帰りしなくちゃあ……」

楽しそうな人々の中を歩いて来る凱歌とコー。
ラフな感じのチャイナ服の2人。
2人の後ろに趙が従っている。
村人たちは、ある程度の距離をおいてコーに礼を述べたり、弟が見つかったことのお祝いの言葉を述べたりする。
その村人たちを押しつけて、数人の役人がコーの前に進み出る。
正装している。
彼らだけ浮いている感じだ。
役人A「(中)コーさん、お帰りなさい。今夜はお招き下さいまして、
ありがとうございます」
コー「(中)村の中を散歩しました。道路がまだ普請されておりませんな。寄付した金は
どこへいったのやら」
そう言うと、あからさまにじろじろと、彼らの服を見る。
役人たち、慌てる。
役人B「(中)なかなか工事がはかどらなくて……。人も集まりませんし……」
役人C「(中)そうそう。技術を持った者がいなくて」
コー「(中)早めにお願ひしますよ。私のお金を、きちんと役立てて下さい」
役人たち、「もちろん」とうなずく。
コー「(中)また後日、その話をしましょう。(顔を寄せ、低く)細かいところまで、な」
役人たち、緊張する。
コー「(明るく)さあ、今夜は楽しんでいって下さい」
役人たち、おずおずと引き下がる。
趙がコーに囁く。
趙「あの者たちに金を渡しても、着服してしまうに違いありません。あの皺一つない服、
あなたの金で新調したのですよ、きっと」
コー「ま、損はないだろう。どこかでその分、きちんと働いてもらうさ」
趙「はあ」
凱歌が気配を感じて、階段の上を見る。
凱歌「(小さく)あ！」
コー「?(見る)」
階段の上に、きなこが立っている。
髪をアップにし、控え目な化粧に質素なチャイナドレス。
それが、活発なきなこによく似合っている。
というより、彼女をとっても美しくみせている。

コーにしては（楊か）センスの良い服、ということか。

コー「ほう、豚にも衣装だな」

コーが凱歌に目をやると、彼の視線はきなこに釘付けだ。

きなこもその視線に気がついて、顔を赤らめながら階段を降りてくる。

きなこ「（来て）やっぱり、おかしい？」

と心配そうに訊く。

凱歌「そ、そんなこと・・・ない。とっても綺麗だ」

コー「娘たちには、帰ってもらった方がいいかな」

きなこ「え？」

コー「だがな、きなこちゃん。ウチの凱歌ちゃんは、ラーメン屋の親父に納まるようなヤツじゃないよ」

きなこ「そんなことない。ホイさんの料理を待っているお客さん、今でもいるんだからね」

凱歌「！（うれしい）」

趙が、コーに何事か囁く。

コーが意地悪く微笑む。

コー「凱歌、あの娘の親たちな、お前の嫁に選ばれなかったら、俺に預けるそうだ」

凱歌「預けるって、1211に女はいない（はっと気がついて）まさか・・・街の妖精・・・」

きなこ「妖精？」

と凱歌を見るが、その顔が暗いので、良い意味ではないと理解する。

コー「若い者たちは街へ出たがっている。そいつらが、稼いだ金を家に送る。親孝行な子供たちだ。だから、親たちも俺に子供を預けたがる。ほら、また来たよ」

少年の腕をぐいぐい引っ張って、母親がやって来る。

母親「（中）コーさん、私の息子もあなたのところで働かせて下さい。この子は働き者ですよ。絶対、お役に立ちます」

母親は、一生懸命息子を売りこむ。

少年はまだ十代前半ぐらいか、幼い顔をしている。

うつむき、時折、脅えたように目を上げて母親とコーを見る。

たまらなくなつて、凱歌が母親に言う。

凱歌「（中）子供を手放してはいけない」

× × ×

フラッシュバック。

5歳の凱歌と日本へ働きに行くという市江の別れ。

涙をこらえながら優しく微笑む市江。

× × ×

凱歌「（中）まだ、母親のことが恋しい年齢だろ」

母親「（中）この子も働きたいと言っています」

凱歌「（中）僕たちがどんなことをしているか、知っているのか」

凱歌の語気が、荒くなる。

母親が脅える。

コーが間に入る。

コー「（中）すまないな。こいつはまだ、よくわかっていないんだ」

凱歌「（中）知っている！あんた、自分の息子を殺し屋にしたいのか！」

コー、思わず凱歌の頬を殴る。

床に倒れる凱歌。

周りの空気も固まってしまう。

人々が注目する。

きなこ「ちょ、ちょっと、何？」

中国語がわからないきなこは、事態が飲みこめず、あわてて凱歌に寄り添う。

脅えて見ている親子。

コー「（母親に中国語で）悪いが、その話はまたにしよう。あなたもよく考えて。街の仕事は厳しいから」

母親は納得しないながらも、少年の手を引いて去る。

きなこ「怖いよ、ホイさん。あなたがあんなに怒るなんて・・・」

凱歌「1 2 1 1には、暗い目をした少年たちがいた。人を殺す方法を教え込まれていくんだ。女の子たちは、身も心もぼろぼろにされる」

きなこ「・・・」

凱歌「あの子たちを、僕のようにしてはならない。目に光を取り戻してやらなくては」

コー「できるものか」

凱歌「！（見る）」

コー「この村に、俺がどのくらい金をつぎこんだか。だが、彼らはもっとよこせと言う」

凱歌「そうさせているのは、あんたじゃないのか」

コー「何だと？」

凱歌「香港の欲望も、故郷の欲望も、すべて、あんたの姿だ。最後には、湖のゴーストタウンのようになるんだ」

凱歌、コーを見上げている。

コーが凱歌を見下ろしている。

コー「お前も・・・俺を責めるのか」

凱歌「！（はっとなる）」

去るコー。

その後から趙。

凱歌「（追って）言い過ぎた。あの人に」

趙「（さえぎって）ご自分で言いなさい。兄弟なのですから」

凱歌「・・・」

趙、コーを追って去る。

そこへ陳が、酒の入ったグラスを片手に寄って来る。

非常に愉快そうだ。

陳「（中）兄弟喧嘩かい？派っ手だねー。（酒を飲み干し）羨ましいよ。ボスに触れてもらえるなんて」

と、凱歌の、コーに殴られた側の頬をなでる。

凱歌、その手を振り払うと、きなこを伴って去る。

陳「（中）ふん、兄弟そろって俺を馬鹿にしていやがる。（給仕に）おい、酒だ！酒、持ってこい！」

カウンターバーのきなこ、酒の入ったグラスを2つ持って、振り返る。

待っている凱歌、沈んでいる。

明るい笑顔を作って、凱歌の方へ行く。

凱歌にグラスを渡そうとする。

凱歌「・・・（いらないと首をふる）」

きなこ「やだ、まだお酒、ダメなの？しょうがないな」

凱歌が止める暇もなく、2つのグラスを空にしてしまう。

きなこ「いろんなお酒があるのよ。今度はどれにしようかなー」

カウンターバーへ向かおうとするきなこを止める。

凱歌「飲みすぎるな」

きなこ「（ふりはらい）あらー、誰に言ってるのかしら？」

凱歌「あ・・・なんだ？この酒乱」

きなこ「悔しかったら、私に酒で勝ってみろっつうの」

凱歌「どういう戦いだよ」

きなこ「(くすりと笑い)よかった。やっといつものホイさんに戻ったね」

凱歌「(も笑い)いつもの？」

きなこ「じゃあ、本当の」

凱歌「とにかく、今夜は酒を控えておいてくれ」

きなこ「いつもよりね」

凱歌「(呆れるが)それから、夜は動きやすい服で寝るんだ」

きなこ「やらしい」

凱歌「(赤くなり)ば、ばか！違う」

会場の明かりが落とされる。

凱歌・きなこ「？」

趙の声「(中)皆様、中庭の氷の芸術をしばし、お楽しみ下さいませ」

凱歌がきなこをいざなって、中庭が見える窓の方へ行く。

色とりどりにライトアップされた氷の彫刻が、幻想的で美しい。

凱歌「いつでも戦えるようにしておくんだ」

きなこ「仕掛けてくるの？」

凱歌「・・・」

凱歌の時計のアラームが鳴る。(午前0時を告げた)

凱歌「(見て)メリー・クリスマス」

きなこ「あ・・・メリー・クリスマス」

凱歌の唇にそっとキスをする。

それはまるで、鳥の羽のように軽いものだった。

凱歌「え？」

と、とまどうのへ、

きなこ「だって、この前のがファーストキスじゃ、ひどすぎる」

凱歌「ご、ごめん」

同・中庭(夜)

ライトアップされた氷の芸術品が並んでいる。

同・裏の山(夜)

コーの別荘が見渡せる。

別荘を双眼鏡で観察している男がいる。

その後方の林の中をこちらへ向かって来る、無数の光。

雪上バイクが近づいて来るのだ。

別荘の人間に気づかれないよう、バイクは次々に明かりを消す。

バイクを降りた者たちが、双眼鏡の男のそばへ続々と集まって来る。

彼らの肩には銃が。

別荘とは大違いの、緊張した空気が流れている。

男、双眼鏡をはずすと・・・周である。

味気ない非常食のような物をかじり始める。

1人の男が周に、折り畳んだ紙を渡す。

広げて、小さな懐中電灯で照らす。

別荘内の見取り図である。

それを次々に囲む男たち。

男たちに何か指示を与える周。

コー・村木の別荘・陳の部屋

夜明け前。

まだ暗い。
ベッドの中の陳。
頬にひんやりと冷たい感触。
目を覚ます。

陳「？」

ずらりと銃が取り囲んでいる。
その中の1つが、陳の頬に当てられていた。
主は趙である。

趙「(中)メリー・クリスマス」

陳「(中)でかいクラッカーだな」

趙のもう片方の手には、例のヌード写真集があった。
開いて見せる。
中には拳銃。

陳「(中)ああ、護身用だな」

楊とその部下たちが、別の部屋にいた陳の手下たちを銃で脅しながら、入って来る。

陳「(中)楊、裏切ったな！」

楊「(中)最初からボスを裏切るつもりは、ありませんでした」

陳「(中)俺は・・・ボスとコトを構えようとは思っちゃいねえ。ただ」

コーの声「(中)ただ・・・何だ？」

コーが入って来る。

コー「(中)命令を無視して別荘(ここ)まで押しかけてきて。しかも大量の銃を持って、
ご機嫌伺い、か」

陳「(中)ボス、どうして王凱歌を次のボスに？周の兄貴じゃなかったのか。そうすりゃ
あ、俺だって・・・」

コー「(ふふんと鼻で笑い、中国語で)納得したか？嘘だな。その時、お前は『どうして
俺じゃなかったんだ』と言うさ」

陳「・・・(凶星)」

コー「(中)同じだ、誰をボスにしようと。こうなることはわかっていた」

陳「(中)じゃあ、最初から粛清しようと？王凱歌を餌にして、俺たちが反旗を翻すのを
待っていたのか」

コー「(中)俺たち？」

遠く(外)から銃声がする。

同・中庭

銃弾が氷の彫刻を粉々にする。

同・陳の部屋

陳「(中)あ！周の兄貴だ！」

コー「何っ!？」

同・裏の山

光の筋が別荘を目指している。
雪上バイクでスキーで、山を下って来る周の手下たちだ。
気の早い者は銃を撃っている。

同・陳の部屋

窓の外を見ているコー。

コー「(中)どういうことだ？」

楊「(中) 周には見張りをつけておきました」
趙「(中) 香港からは何も言ってきていません」
陳「(中) みーんな、こっち側についちゃったってことじゃないのか」
コー「・・・」
陳「(中) ここも例外じゃなかったりして」
陳を囲んでいた銃の半数が、一斉にコー、趙、楊に向けられる。
陳「(中) ね！」
楊がコーをかばうように前へ出る。
陳「(中) 殺せ！」
引き金が引かれる。
コー、廊下へと逃げる。
激しい銃撃戦。
手下の陰に隠れながら、
陳「(中) ボスを追え！」

同・凱歌の部屋・前

廊下を走って来たコーが、凱歌の部屋にとびこむ。

凱歌は、別荘の敷地に入りこんできた敵を、カーテンのすきまからライフルで狙い撃ちしていた。

コー「凱歌！」
凱歌「！（ふり返る）」
コー「へりで逃げる」
凱歌「きなこさんを！」
凱歌、コーにライフルを放る。
受け取る。
2人、部屋をとびだし、左右に分かれる。

同・きなこの部屋

銃弾が撃ちこまれている。

きなこ、ベッドの下に潜りこんでいる。

部屋のカーテンは開けばなしになっているし、ベッドのサイドテーブルのライトもつけっぱなしになっている。

ドアが開き、凱歌が部屋にとびこもうとするが、銃弾により、いったん廊下へ引き返す。

凱歌「きなこさん！」
ベッドの下からきなこの声がする。
きなこの声「ホイさん、ここ。ベッドの下！」
凱歌、ほふく前進でベッドへと向かう。
ベッドの下に潜りこんでくる。
凱歌「カーテン、閉めなかったのか。おまけにライトまで」
きなこ「ごめーん。すぐ、寝た」
凱歌「だから、飲みすぎるな、と。ま、服は昨夜のままじゃなくてよかった」
きなこ、動きやすい男物のチャイナ服である。
凱歌、くるりとあお向けになる。
きなこ「？」
ベッドの裏に拳銃が2挺、マガジン（弾倉）が1つ、張りつけてあった。
きなこ「いつの間に？」
凱歌、マガジンを取り口にくわえる。

きなこがそれを手に取る。

凱歌「あ、ありがとう」

凱歌、拳銃を取る。

凱歌「すまない。結局、君を巻き込んでしまった」

きなこ「私が望んだことよ」

凱歌「お父さんに、怒られてしまうな」

ベッドの下から出ようとする凱歌を止めて、

きなこ「皆、あなたに何かあっても泣くよ」

凱歌「・・・」

凱歌、銃弾の飛ぶ中へ、ほふく前進で出て行く。

部屋の中央あたりであお向けになると、呼吸を整える。

腹筋で上体を起こすと、まず、サイドテーブルのライトを撃つ。

部屋の中が暗くなる。

次に、窓に向かって一気に2挺の拳銃をぶっ放す。

狙いは正確だったらしい。

敵からの銃弾がすっかり止む。

凱歌「行こう！」

凱歌、拳銃を1挺捨てる。

ベッドの下から出て来るきなこ。

同・廊下

きなこの部屋からとびだして来る、凱歌ときなこ。

一方へ走りだす。

きなこ、マガジンを凱歌に渡す。

走りながらマガジンを替える。

廊下のつきあたり。

曲がろうとするきなこを止める凱歌。

間一髪、きなこの脇を銃弾が通り抜けていく。

壁に身を寄せる2人。

凱歌がそっと顔をだして、様子をうかがう。

そこへ、まぶしいライトが当てられる。

廊下の向こう、出口の所に陳とその手下たちがいる。

陳「(中)王凱歌、みーつけた！」

凱歌「陳・・・」

陳「(中)撃て！殺せ！」

一斉射撃。

だが、銃弾は壁を削っていくだけ。

凱歌、きなこをかばって抱きしめる。

きなこ、凱歌の腕の中で落ち着いている。

凱歌、チャンスを待っている。

飛び散る壁の破片。

銃撃を止めて、

陳「(中)ええーい、誰か、引きずり出してこい！」

陳、適当に自分のそばにいた男たちを前へだす。

男たち、銃を構えながら壁に近づいて行く。

と、彼らの1人が倒れる。

下を見ると、うつぶせになった凱歌が撃ってきている。

そのまま転がりながら、凱歌が撃ってくる。

慌てて手下たちが撃つ。

凱歌の頬をかすめる銃弾。

血が滲む。

腕にも当たるが、ひるまない。

凱歌の放つ銃弾は、確実に敵に命中していく。

向こうの壁からこちらへ、転がりながら戻って来る。

再び壁の向こうに凱歌が消えた時、近づいて行った手下たちは皆、倒れている。

陳「（中）なーにやってんだ！」

と、そばにいる手下を殴る。

きなこ、戻ってきた凱歌が血だらけなので心配する。

きなこ「大丈夫？」

凱歌はきなこに拳銃を示し、小さく首をふる。

「弾がない」ということだ。

きなこ「・・・」

凱歌「（陳に中国語で）1 2 1 1の男たちは、強いボスについていくんだよな！」

陳「！（手下たちを見る）」

手下たち、陳をじっと見ている。

陳「（凱歌に中国語で）差しで勝負、か。いいだろう！」

陳、拳銃を手下に預けようとするが、やめて服の下に隠し持つ。

手下「・・・」

凱歌、拳銃を捨てる。

きなこ「ホイさん、何を？」

凱歌「待っていて」

凱歌、とびだして行く。

きなこ「ホイさん！」

凱歌と陳がぶつかり合う。

鈍い音がした。

陳の攻撃は『剛』である。

凱歌は『柔』で応戦する。

が、陳は怪我をした方の腕を攻めてくる。

飛び散る血。

腕が動かなくなっていく凱歌。

きなこの蹴りが陳を襲う。

陳も蹴りで応戦する。

陳の蹴りは重く、きなこの足がしびれてくる。

きなこの肩に凱歌の手が置かれる。

凱歌、回転して彼女と入れ替わる。

陳、再び凱歌の腕を狙ってくる。

それを片腕だけで防ぎきる。

焦る陳。

執拗に攻める陳の前から、凱歌の姿が消えた。

陳「？」

体を沈めた凱歌が、陳の足をなぎ払う。

ぶざまに床に転がる。

彼に向かって、蹴りを繰り返す凱歌。

転がって逃げる陳。

凱歌の蹴りが追う。

ぼこぼこ床に穴が開く。

凱歌の蹴りに気がこもっている。

もはや陳は、逃げることに考えていない。

壁に追い詰められた陳。

とどめの蹴りを入れようとした時、陳が拳銃を出し、撃つ。

凱歌、避けたように見えたが、床に倒れる。

きなこ「ホイさん！」

陳「(中)女、動くな！」

と、きなこに拳銃を向ける。

そのわずかな隙をついて、凱歌、魚が水面をはねるように飛び起きて、陳に蹴りを入れる。

壁にめりこむ陳。

驚いた手下たちが、凱歌を撃とうとする。

しかし、彼らのそばに近づいていたきなこが、拳法によって、ハリケーンのごとく一気に片付けてしまう。

2人、出口へと急ぐ。

しかし、凱歌は顔をしかめ、腹部を押さえている。

陳の放った銃弾が、当たったらしい。

同・ヘリポート

ようやく白白と夜が明けてきた。

ヘリコプターを死守している、1211の男たち。

パイロットが離陸の準備をしている。

凱歌ときなこが走ってくる。

男たちが援護射撃をする。

ヘリコプターのドアが、内側から開けられる。

八雲だ。

八雲「早く！」

凱歌がきなこを、中へと押し込む。

凱歌「ボスは？」

八雲「まだだ」

凱歌「(パイロットに中国語で)行ってくれ！」

と、ドアを閉めようとする。

きなこ「(止めて)何で？ホイさんも乗って」

凱歌「兄さんを」

きなこ「え？」

凱歌「助けに行く」

きなこ、凱歌の手をとる。

きなこ「行かないで！」

凱歌「君は生きて！僕の夢を話したね。君がつないでいってくれ」

きなこ「いやよっ！自分で叶えて！」

凱歌、きなこの手を強く握りしめる。
凱歌「（目を見て）頼む」
ヘリコプターのエンジンがかかる。
八雲「必ず、迎えに来てやれよ！」
凱歌「・・・（うなずく）」
きなこ「お願い。離さないで！」
凱歌、きなこの手を優しく離す。（スローモーション）
きなこから、すべての音が断ち切られる。
エンジンの音も聞こえない。
凱歌の手を追って、思わず飛びだそうとするきなこ。（スローモーション）
後ろから、きなこを抱きすくめて止める八雲。（スローモーション）
凱歌の手によって、ドアが閉められていく。（スローモーション）
凱歌「・・・」
きなこ「・・・」
大きな音でヘリコプターのドアが閉まる。
一際大きな銃の発射音。
凱歌に衝撃が走る。
銃弾が左肩に当たった。
浮かび上がったヘリコプターの窓に、血が飛ぶ。
ヘリコプターの中のきなこの口が、驚いたように「あ！」となる。
凱歌が、心配させまいときなこを見上げて微笑む。
ヘリコプターの窓に張りつき、泣きそうになっているきなこ。
凱歌、そばにいる男から拳銃を受け取り、腰へねじこむ。
別の男がマシンガンを渡す。
凱歌、撃ってヘリコプターを援護する。
ヘリコプターは、無事に上空へ。

ヘリコプター・内
きなこから見て 。
もう、男たちが小さく見える。
男たち、銃を撃ちながら散って行く。
凱歌も撃ちながら、別荘の中へと引き返して行く。

コー・村木の別荘・上空
銃弾が飛び交う中、ヘリコプターが去って行く。

完結へつづく